

## 黙示録12章1-6節 「イスラエルに対する悪の勢力」

### 1A 産みの苦しみをする女 1-2

1B イスラエルの民 1

2B キリストを産み出す器 2

### 2A 赤い大きな竜 3-4

1B 国々に権威を与えた者 3

2B 天の三分の一の星 4a

3B 子を食べようとする竜 4b

### 3A キリストの現れ 5-6

1B 鉄の杖を持つ牧者 5

2B 荒野に逃げる女 6

## 本文

黙示録 12 章を開いてください。私たちは、前回、第七のラツパが吹き鳴らされたところを見ました。それに対して、天においては、主なる神とキリストが、この世の諸々の王国の王となったという宣言がありました。けれども、諸国の民が怒っています。こうした神とキリストの支配に対して怒っているのです。12 章また 13 章は、そうした諸国の怒りが、選ばれた民に対して向けられるところを見ていきます。12 章は、選びの民であるイスラエルに、竜と表現されている悪魔が滅ぼそうとしている幻を見ていきます。(1-6 節を読む)

これから私たちは、聖書の歴史、また人間の歴史全体において、二つの大事なことを見ていきます。一つは、激しい霊の戦いがあるということです。もう一つは、神がイスラエルを選び、その選びのゆえ、悪魔からの攻撃が激しいということでもあります。

一つの、激しい霊の戦いについてですが、一つ、ちょうどコロナの流行が始まった時に、誰かが教えてくれた本の一部の文言に、感銘を受けたことがあります。それは「緊急事態宣言」という言葉が国々から発せられた時です。日本でも時の安倍首相が宣言しました。けれども、その書は、欧州で世界大戦が起こっていた頃に書かれたもので、同じように国が緊急事態宣言下にあったようです。けれども、彼は、「そもそも、人類の歴史が緊急事態宣言下にある。アダムが罪を犯した時以来、人間はノーマル、正常な社会の中にいないのだ。キリストが再臨されるまで、その魂が減んでいくという緊急事態の中にあるのだ。」というような内容でした。私も強く感じますね。その異常な状況を、私たちはあまりにも長く目にしているのだから、感覚が麻痺してしまい、異常な事態であることを忘れてしまうことがあります。例えば、人々が死ぬことです。死がいかに悲しみ、苦しみ、嘆き

をもたらしているかを忘れてしまいます。ましてや、自然死でなく、自殺はもっと深い悲しみをもたらします。そんなこと、正常ではありません。

このように、悪魔は人類の歴史の始まりから深くかかわっています。イエス様は、「悪魔は初めから人殺しで、真理に立っていません。」と言われましたが(ヨハ 8:44)、神の大きな計画の中で、その計画を阻もうとする悪魔の存在を無視することは決してできません。

そしてそうした霊の戦いにおいて、もう一つ、神の選びの民を滅ぼそうとする歴史があるということ、私たちは肝に銘じないといけません。イスラエル旅行で、私は団長として、みなさんをヤド・ヴァシェム、つまり、ホロコースト記念館にお連れしました。ナチスドイツの仕業で、ユダヤ人のうち六百万人が殺されたと言われていています。一通りの見学を終えた時に、その敷地で、みなさんにお尋ねしました。「イスラエルの民を憎み、殺そうとする、こうした反ユダヤ主義は、いつから始まったと思いますか？聖書時代にまでさかのぼっていただいて、構いません。」なかなか、返事をしてくれませんでした。ある人は、エステル記における、ハマンのユダヤ民族滅亡の企みを挙げてくれましたが、あれはまさに、聖書時代のナチスの最終計画であります。けれども、もっとさかのぼることができます。「出エジプト」です。ファラオが、ヘブル人の男の子はすべてナイル川に投げ込め、と命じたのです。

出エジプト記というのは、イスラエルの民が誕生したことを書き記しています。アブラハムが召されて、イサク、ヤコブへと約束が受け継がれましたが、民族になったのはエジプトにおいて、であります。そして、シナイ山の麓に連れていかれ、イスラエル人が宝の民と呼ばれるようになるのです。その民の誕生というのが、実は、イスラエル人が強くなり、増え広がったことによって恐れを覚えて、これを滅ぼそうとするファラオ、世の王の思惑から来ていました。この背後に、悪魔がいました。悪魔が、神の愛された選びの民を滅ぼそうとしていたのです。そして、イスラエルにとっての神の救いとは、こうした憎悪や殺意の攻撃から救われることを意味していました。敵が滅ぶ時に、イスラエルの救いが完成します。

そして、イスラエルの歴史は、アッシリア、バビロン、ペルシア、ギリシア、そしてローマと、虐げられる道を辿っていきました。これらのことは、ダニエル書などに預言されました。ローマによって、エルサレムを破壊され、世界の流浪の民となりました。その離散の歴史において、特に欧州のキリスト教の社会で、「ユダヤ人はキリスト殺し」ということで、差別を受け続けました。特定の職業につくことや、土地の所有を禁じました。また、「黒死病」と呼ばれましたペストが蔓延した時に、ユダヤ人がスケープゴートとされて殺されました。スペインでは、強制的にキリスト教に改宗させられ、追放を受けました。ロシアやポーランドでは、ポグロムと呼ばれるユダヤ人に対する暴行がはびこりました。ロシアの秘密警察は「シオンの議定書」なる、世界をユダヤ勢力が支配しているという陰

謀論に基づく、偽書、偽りの書物を作成し、今に至るまでそれが一部の人々の強固に信じられています。ユダヤ人の世界支配の陰謀説が、後にナチスドイツがユダヤ人虐殺の根拠となります。

西欧社会に、人権思想が出てきました。平等や自由の思想が広まったのです。ところが、ドレフェス事件というものが起こりました。フランスのユダヤ系の軍人が、いわれなき告発で濡れ衣を着せられたのです。それに衝撃を受けた、テオドールというユダヤ人は、「ユダヤ人が主権を持つ国を持たない限りは、この問題は解決しない。」とし、イスラエルの国を建てるビジョンを語り始めました。そうこうしているうちに、ナチスが台頭します。ユダヤという人種が世界にあるから問題なのだということで、最終解決という言葉で、ユダヤ人を撲滅する計画を立てたのです。

そして、イスラエルには国が建てられましたが、それでもアラブ諸国が一斉に生まれたばかりのイスラエル国に戦争をしかけました。今に至るまで、ユダヤ人を滅ぼしたいと願う動きは、残念ながら生き活きと残っているのです。このように、人類の歴史には、悪魔が何とかして神のご計画を滅ぼしたいと願っている歴史があり、イスラエルの歴史にそのことが如実に現れているのです。

## 1A 産みの苦しみをする女 1-2

### 1B イスラエルの民 1

<sup>1</sup> また、大きなしるしが天に現れた。一人の女が太陽をまとい、月を足の下にし、頭に十二の星の冠をかぶっていた。

第七のラツパが吹き鳴らされ、天において、大きなしるしが現れました。これを見れば、明かにイスラエルの民であることが、聖書から分かります。創世記 37 章です。ヤコブの子ヨセフが夢を見て、それを家族に話している場面です。一つは、畑の束の夢でしたが、二つ目が、この太陽と月と星の夢でした。9 節を読みます。「再びヨセフは別の夢を見て、それを兄たちに話した。彼は、「また夢を見ました。見ると、太陽と月と十一の星が私を伏し拝んでいました」と言った。』と言った。」この夢の話聞いて、兄たちだけでなく、父ヤコブも怒りました。なぜなら、太陽は自分のこと、月は母親ラケルのこと、そして 11 の星は、ヨセフ以外のヤコブの息子たちを表していたからです。

そして、イスラエルが女として現れることは、とても大切です。アダムが罪を犯した後に、主は、「女の子孫」が現れることを語られていました。「創 3:15 わたしは敵意を、おまえと女の間、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。」その子孫が、エバはカインがそうであると願い、またノアの誕生にもその期待が込められていました。その期待は、アブラハムの子孫の中に神の約束として登場します。「創 22:17-18 確かにわたしは、あなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように大いに増やす。あなたの子孫は敵の門を勝ち取る。18 あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたが、わたしの声に従ったからである。」アブラハムの子孫から、敵の門を勝ち取り、また

すべての国々が祝福を受けるという約束が受け継がれたのです。そして、この子孫のうち、ダビデの世継ぎの子が、神の国の王、キリストになると約束されたのです。「Ⅱサム7:12-13 あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。13 彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」

このようにして、イスラエルは、キリストを産む女としての使命を帯びています。そして、神の民は、神を夫とする妻としても描かれています。例えば、エレミヤ 3 章には、イスラエルの神ではない外国の神々を拝むイスラエルのことを、淫行を働いている不貞の女にたとえられています。ちなみに、教会は、婚姻を待っている花嫁としてたとえられていますし、また、神に反抗する霊が、黙示録 17 章で、大淫婦としてたとえられ、神と自分との関係が結婚関係に例えられています。

## 2B キリストを産み出す器 2

<sup>2</sup>女は身ごもっていて、子を産む痛みと苦しみのために、叫び声をあげていた。

もう少し先を読めば、彼女が身ごもっている子はイエス・キリストであることが分かります。イエスを産むに当たって、イスラエルが産みと痛みと苦しみをともなっています。これは、どのような痛みなのか？ダニエル書を読みますと、ユダヤ人のバビロン捕囚後の、世界史が預言されていますが、バビロンからメディア・ペルシア、メディア・ペルシアからギリシア、そしてローマへと続きます。それぞれの時代にてユダヤ人は痛みを受けてきましたが、ローマ時代は、鉄の支配であり、反逆者には容赦ない制裁が加えられる時代になりました。当時のことを「パックス・ロマーナ」と呼びますが、戦争がなくなり平和になったということです。それはローマが、ことごとく当時の国々を掌握し、自治を認めながらも税金や軍隊によって支配していったからです。ユダヤ人たちが、ローマ時代に出てくるメシア、ネブカデネザルが見た人の像の、足と部分をことごとく打ち砕く石、メシアを待ち望んでいました。圧制からの解放者の約束を待ち望んでいたのです。

その時が満ちた時に、主が来られました。ですから、民のメシアに対する待望には、私たちの想像を超える期待がありました。バプテスマのヨハネがもしかしたらキリストではないか？と思って、広域からバプテスマを受けていました。主ご自身の宣教にも全国から人々が主のところに来て来ました。その時に終わりが来ると熱狂的に信じていたのです。

## 2A 赤い大きな竜 3-4

### 1B 国々に権威を与えた者 3

<sup>3</sup>また、別のしるしが天に現れた。見よ、炎のように赤い大きな竜。それは、七つの頭と十本の角を持ち、その頭に七つの王冠をかぶっていた。

女のしるしの次は、「炎のように赤い大きな竜」のしるしです。女と同じように、竜も天において現れています。彼の正体は、9 節を読むと出てきます。「その大きな竜、すなわち、古い蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれる者」です。悪魔です。竜というのは架空の動物と言われていますが、聖書には実在の生き物として描かれています。ヨブ記 41 章に「レビヤタン」という動物が出てきます。その描写を読むと、いわゆる竜のような動物であり、またそれは悪魔の描写だとも言えます。そして、イザヤ 27 章 1 節には、「その日、【主】は、鋭い大きな強い剣で、逃げ惑う蛇レビヤタンを、曲がりくねる蛇レビヤタンを罰し、海にいる竜を殺される。」エバを惑わしてから、蛇は地を這うようになりましたが、もしかしたらその前は、竜のようであったのかもしれない。そしてこの竜は、「赤い」のですが、それは地獄からの炎です。怒り狂っている炎いです。また、血を流していく流血の血の色ではないかと思えます。

そして、竜は、「七つの頭と十本の角を持ち、その頭に七つの王冠をかぶっていた」とあります。これは、次の章 13 章においてこれが獣の姿であり、それから 17 章においてその秘儀の意味するところが解き明かされます。私たちは既にダニエル書 7 章において、ローマであり、復興ローマでもある第四の獣に似ていることに気づくことができるでしょう。13 章にて、これが反キリストであることが分かります。つまり、反キリストを支配している、霊的な存在が悪魔であるということです。

コリント第二 4 章 4 節にはサタンは「この世の神」と呼ばれていますが、これらダニエル書にあらわれている、国々の行なっている横暴なことの背後には、サタンが働いているということです。国々は、主ご自身が立てています。「ロマ 13:1 人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。」神から来ているのですが、問題は、その権威の与えられている者たちが、自分たちにこそ力があると思い込み、うぬぼれることです。ダニエル書は、そのことも描いており、バビロンの王ネブカドネツアルが、金の像を立てて、それを拝ませようとした。そして、自分の栄華や権力を宮殿で誇っている時に、天からの使いによって獣のようにされたことが書かれています。そして、彼の孫、ベルシャツアルは、エルサレムの神殿からの器で、神々を賛美したために、バビロンが滅ぼされたのです。

このように、自分自身にあると思っ高ぶる時に、その背後には、高ぶりによって墮落した悪魔がいます。イザヤ書 14 章には、永遠の廢墟に定められたバビロンの背後に、明けの明星、ルシファーがいることが明らかにされています。

そして、このような国々の高ぶりは、イスラエルの国に向けて現れるのです。ダニエル書 10 章において、ペルシアを動かしている「ペルシアの君」の存在、ギリシアを動かしている「ギリシアの君」の存在がありました。そして、アンティオコス・エピファネスという、ユダヤ人を迫害するギリシアの王がいて、彼を原型として、世の終わりに出てくるのが、荒らす忌まわしい者、反キリストです。彼が選びの民を滅ぼすべく、最後のあがきをするのです。このように、王たちがユダヤ人に対して

迫害を行なうも、その背後には悪の天使、墮落した天使の存在があることを知りました。私たちが  
見ている世界の背後に、このように霊の戦いがあるということを知る必要があります。

## 2B 天の三分の一の星 4a

<sup>4a</sup> その尾は天の星の三分の一を引き寄せて、それらを地に投げ落とした。

「天の星」ですが、聖書では「星」はしばしば、天使のたとえとして使われています。例えば、この黙示録でも、イエス様の右の手の中にあつた七つの星は、七人の御使いであるとありました(1:20)。今サタンが、天使の三分の一を自分のところに引き寄せ、そしてそれらを地上に投げました。サタンは、イザヤ書 14 章に出てくるルシファー、またエゼキエル書 28 章に出てくる守護者ケルブであると言われています。彼はもともと天使長でしたが、自分の美しさに高ぶり、高慢になった神より高くなろうとしました。そこで神は、彼を天から地へと投げ落とした、とあります。悪魔は、自分が投げ落とされて、それから、天にいる三分の一の天使を自分の味方につけたと思われます。それら墮落した天使が、聖書で「悪霊」と呼ばれているものではないかと考えられます。

竜が、「地に投げ落とした」とのことですが、暗闇の中に閉じ込めることが神の御心でした。「ユダ 6 またイエスは、自分の領分を守らずに自分のいるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の鎖につないで暗闇の下に閉じ込められました。」けれども、竜がこの墮落した天使どもを地上に投げたことによって、地にも徘徊するようになりました。

その中で、レギオンにイエス様が対峙された時に、「ルカ 8:31 悪霊どもはイエスに、底知れぬ所に行けと自分たちにお命じにならないようにと懇願した。」と言いました。そのおるべき場所に閉じ込められることを非常に恐れていました。そこでイエス様が宣教活動されていた時は、次から次へと悪霊付きが出てきます。イエス様が地上に現れた時に、悪霊の働きが異常に多かったのは、この三分の一の星を竜が投げ落とした結果なのでしょう。主が来られたのは、そうした「イザ 61:1-2 捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、2【主】の恵みの年」を告げるとあります。

## 3B 子を食べようとする竜 4b

<sup>4b</sup> また竜は、子を産もうとしている女の前に立ち、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた。

この出来事は、マタイ 2 章 16 節に出てくるヘロデ王の幼児虐殺のことです。こう書かれています。「ヘロデは、博士たちに欺かれたことが分かると激しく怒った。そして人を遣わし、博士たちから詳しく聞いていた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子をみな殺させた。」マリアから産まれたイエスは、支配者ヘロデの背後で働く悪魔によって、滅ぼされそうになったのです。

### 3A キリストの現れ 5-6

#### 1B 鉄の杖を持つ牧者 5

<sup>5</sup> 女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖をもってすべての国々の民を牧することになっていた。その子は神のみもとに、その御座に引き上げられた。

メシアが、鉄の杖をもって牧するという事は、預言の中で語られていました。詩篇二篇には次の預言があります。「詩 2:7-9 私は【主】の定めについて語ろう。主は私に言われた。『あなたはわたしの子。わたしが今日あなたを生んだ。8 わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与える。地の果ての果てまであなたの所有として。9 あなたは鉄の杖で彼らを牧し陶器師が器を砕くように粉々にする。』」鉄は、力を示しています。強大な軍隊があっても反抗しようとしても、主はことごとくそれを打ち砕かれます。それが、神の国において、正義と平和が確立される理由です。今、いろんなところで戦争が起こっていますが、それは権威が二つ以上あるから起こっていません。権威が一つになるまで戦争は続きます。しかし、すべての権威がキリストの下に集められる時に、正義を完全に体現しているキリストが支配されるので、世界が平和になります。

黙示録 2 章、ティアティラの教会に対して、勝利者に対してイエス様は約束されました、「2:26-27 勝利を得る者、最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与える。27 彼は鉄の杖で彼らを牧する。土の器を砕くように。」キリスト者が、キリストご自身の権威を任されて鉄の杖で牧するのです。19 章に、白い馬に乗って、諸国の軍隊と戦われるイエス様の姿があります。15 節にこう書かれています。「この方の口からは、諸国の民を打つために鋭い剣が出ていた。鉄の杖で彼らを牧するのは、この方である。」イエスさまは地上に戻られて、正義によって世界を支配されます。この方に反逆する者は鉄の杖でことごとく滅ぼされます。

主は、十字架刑によって死なれ、三日目によみがえられました。勝利しました。その後、天に引き上げられました。これが、一時的であり、この方が父なる神の右の座に着いておられて、しかし立ち上がり、地上に戻って来られるという約束が込められています。詩篇 110 篇 1-2 節に、その預言があります。「1 【主】は私の主に言われた。「あなたはわたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。」2 【主】はあなたの力の杖をシオンから伸ばされる。「あなたの敵のただ中で治めよ」と。」イエス様は、この箇所を取り上げて、神殿の敷地でパリサイ派たちと議論されましたね。キリストがこのような方であることを、ユダヤ人は良く知っていました。

#### 2B 荒野に逃げる女 6

そして 6 節は、男の子が天に引き上げられた後の、預言です。<sup>6</sup> 女は荒野に逃れた。そこには、千二百六十日の間、人々が彼女を養うようにと、神によって備えられた場所があった。

5 節と 6 節の間には、相当の開きがあります。ダニエル書 9 章の七十週の預言で学びましたように、かなり長い期間になっています。「9:26 その六十二週の後、油注がれた者は断たれ、彼には何も残らない。次に来る君主の民が、都と聖所を破壊する。その終わりには洪水が伴い、戦いの終わりまで荒廢が定められている。」エルサレムの再建の命令が出て、それから七十週が始まりました。一週が七年間です。七週と六十二週の後までは、そのまま 463 年過ぎて、それで油注がれた者、つまりメシアが絶たれました。十字架につけられて、三日目によみがえり、そして天に引き上げられたのです。

ここから、主の、ユダヤ人のための約束、つまり神の都エルサレムとユダヤの民のための約束は一時停止しているのです。今、読んだように、君主の民が来るとあります。これはローマの民のことです。紀元 70 年に、エルサレムと神殿を破壊しました。そして、ユダヤ人が追放された後のエルサレムは、異邦人が踏み荒らす歴史があり、その戦いを洪水に例えています。戦いが終わりまで続く、とあり、それはハルマゲドンの戦いを最終的には指しています。つまり将来にまで至る戦いなのです。それから 27 節で、その君主、反キリストが多くの者と堅い契約を結び、最後の週、第七十週が始まります。その半週には、いけにえとささげものをやめさせるのですが、それが、イエス様が警告された、聖所に荒らす忌まわしい者が入って行くという出来事です。「9:27 彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる。忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる。そしてついには、定められた破滅が、荒らす者の上に降りかかる。」その半週が、三年半のこと、ここでは、「千二百六十日の間」となっています。

ここで、「女は荒野に逃れた。」とあります。イエス様がオリーブ山で言われました、反キリストの現れの部分を改めて読みましょう。「マタイ 24:15-21 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら——読者はよく理解せよ——16 ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。17 屋上にいる人は、家にある物を取り出そうとして下に降りてはいけません。18 畑にいる人は上着を取りに戻ってはいけません。19 それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです。20 あなたがたの逃げるのが冬や安息日にならないように祈りなさい。21 そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難があるからです。」このように、大患難がユダヤ人を襲います。これが、終わりの日における、最終的なホロコースト、ユダヤ人殺しの試みであります。

13 節以降に、その詳しい話をヨハネは書き記していますが、ここでは、「荒野」という言葉に注目したいです。イエス様は「山に逃げなさい」と言われていて、ここ 6 節には、「荒野」となっています。これは矛盾しません。ユダヤの地域は山地です。山地にいる人に山に逃げなさいというのは、なんともおかしいです。けれども、エルサレムに行くと分かります。はるか東のほうに、死海の向こうに、ヨルダン川の向こう側に、高地が広がっています。特に死海の南東には、セイルと呼ばれる山

が連なっており、エドムの領地でしたが、そこがはげ山なのです。黄褐色の山々が連なっています。そこに逃げることとなります。

この詳しいことは 13 節以降を学ぶ時に見ていきましょう。ここでは、女であるイスラエルが、キリストを産み出した後も、竜に滅ぼされそうになるということを覚えたいと思います。キリストを産み出したのであるから、イスラエルはもはや、神のご計画の中で関係がないと思うキリスト者が多くいます。けれども、その読み方が間違っていることは、ここではっきりしています。イスラエルが、神に用なしにされているなら、悪魔に狙われるはずがありません。神に愛され、選ばれているからこそ、その愛は不変だからこそ、悪魔は滅ぼそうとしているのです。確かに、キリストこそがすべての民族をもたらず救いが来たのであり、イスラエルもキリストによって救われるのですが、神が初めに、イスラエルの民と国に約束されたことが真実だからこそ、異邦人を憐れみによって選ばれた神の選びも確かなのです。もし、神がイスラエルを見捨てたのであれば、神の私たちに対する選びも、途中で放棄するという危ういものとなってしまいます。

イスラエルに対する神の愛を、パウロ自身が異邦人のキリスト者向けに語っているところで、締めくくりたいと思います。「ロマ 11:25-29 兄弟たち。あなたがたが自分を知恵のある者と考えないようにするために、この奥義を知らずにいてほしくはありません。イスラエル人の一部が頑なになったのは異邦人の満ちる時が来るまでであり、26 こうして、イスラエルはみな救われるのです。「救い出す者がシオンから現れ、ヤコブから不敬虔を除き去る。27 これこそ、彼らと結ぶわたしの契約、すなわち、わたしが彼らの罪を取り除く時である」と書いてあるとおりです。28 彼らは、福音に関して言えば、あなたがたのゆえに、神に敵対している者ですが、選びに関して言えば、父祖たちのゆえに、神に愛されている者です。29 神の賜物と召命は、取り消されることがないからです。」